〈社会科教育情報〉

「南洋」の戦跡・慰霊顕彰施設について

大 庭 大 輝*

1. 「南洋」に残る戦争の跡

6人乗りの軽飛行機から見下ろすと，コバルトブルーの海に浮かぶサイパン島やテニアン島には，生い茂る草木の中に戦争の傷跡がしっかりと残っていた。本稿では，2006年10月に行なわれたサイパン，テニアン，グアムにおける戦跡・慰霊碑巡見の経験の一端と私自身の感想を述べ，近年注目をあつめる「戦争遺跡」や慰霊顕彰施設と社会科教育の関連について述べてみたい。紙幅の関係上，参考文献や具体的な事例の紹介，事項の解説は最低限にとどめる。

サイパンやテニアンを含む北マリアナ諸島，およびパラオ，チュークなどを加えた地域はかつて「南洋群島」と呼ばれ，日本の統治下にあった。1941年から始まった太平洋戦争において，これらの島々は日本の「絶対国防圏」に位置付けられ，民間人も巻き込んだ激戦の地となった。よって，日米開戦直後に日本が占領した米領グアムを含め，現在日本人観光客が多く訪れるサイパン，テニアンはじめ旧「南洋群島」には戦跡や慰霊施設，「海の満鉄」と呼ばれた南洋興発株式会社関係の遺構など日本統治期の足跡が無数に存在している。また，特に彩帆（サイパン）香取神社などの神社が復元されている点は，旧「満州」などアジア地域には見られない特徴である。

2. サイパンを訪ねて

空港からホテル，ビーチへと向うだけでも，サイパン島内ではいたるところにトーチカ，弾薬庫，戦車などの残骸や部隊・個人規模の慰霊碑，神社等が目に飛び込んでくる。だが，サイパンの戦跡や慰霊碑が最も多く見られるのは島の北部である。この地域には，昨年天皇皇后が訪問したことでも知られるバンザイクリフ（プンタンサバネタ），スーサイドクリフをはじめ，「中部太平洋戦没者の碑」「太平洋韓国人追念平和塔」「おきなわの塔」などの大きな慰霊碑がある。この3つの記念碑が並び立つことが，現在も続く沖縄・アジアを巡る諸問題を象徴しているようである。

シーズンや時間帯にもよるのかも知れないが，我々が訪れたとき，マッピ山にあるスーサイドクリフ，サバネタ岬に位置するバンザイクリフには日本人を含めた東アジアの観光客がまばらに見える程度で，喧騒を離れ，遠く波の音が轟いていた。しかし，その一方バンザイクリフには個人や部隊，宗教その他の団体による記念碑・慰霊碑が林立しており，奇異ともいえる光景を作り出していた。軍民問わず集団自決の場となったこの地に立つと，犠牲を生むに至った戦前・戦中の問題と同時に，「誰を」「どのように」慰霊・追悼するのか，してきたのかという戦後の問題をも考えさせられる思いがした。最近公開された映画の舞台として，硫黄島が注目を集めているものの，歴史認識が争点となる中韓を初めとするアジアに比べ，「南洋」と戦争を結びつけられる人が果たしてどのくらいいるだろうか。

3. テニアン，グアムを訪ねて

冒頭に紹介したテニアン島はサイパン島のすぐ隣に位置し，島内には旧日本軍の通信施設や司令部などの軍事施設，南興の事務所，消防署などの跡が生々しい弾痕を留めたまま残されている。テニアンにもスーサイドクリフと呼ばれ

*筑波大学大学院

る場所が存在し，慰霊碑等が無数に建てられているが，そこへ通じる車道は2006年10月時点では手前で閉鎖されていた。また，広島・長崎に原爆を投下した2機のB 29が飛び立ったテニアンの北部ハゴイには，現在も原爆を取り付けたピットがそれぞれガラスケースをかぶせる形で保存され，英語の案内板がつけられていた。

テニアンの戦跡については，島を訪れる観光客自体がサイパンに比べて圧倒的に少ないこともあり，我々がそういった場所で観光客に遭遇することは全くなかった。スーサイドクリフのある岬にはサイパン同様多くの碑が建てられていたが，全体的に自然の中に取り残されたかのようなテニアンの遺跡は，逆に風化に抗う歴史の存在感をもつように感じた。また，アメリカのサイパン侵攻60周年を期に整備された原爆の揚弾場と，対照的に草木に埋もれ案内板も不備な旧日本軍司令部跡は，戦後史の一側面を象徴するようでもあった。

最後にグアムについて触れたい。同島は占領時期の短さもあって，旧委任統治領ほど日本統治の痕跡や戦跡は多くない。それらを全く目にすることなく帰国する観光客も多いだろう。戦跡こそ少ないが，北部のジーゴには平和記念公園が存在する。小畑英良中部太平洋方面軍司令官の自決地近くに作られたこの公園には，政府をはじめ部隊など様々な団体による慰霊碑や，太平洋戦争で亡くなった全ての戦没者を慰霊する大きなモニュメントが建てられている。しかし，近年は維持費など先行きの心配される問題もあるという。我々が訪れた際には，年配の日本人を中心とした現地ツアーと思しき一団に出会った。

大野俊『観光コースでないグアムサイパン』（高文研，2001年）には，元グアム観光局長の話として，グアムで戦争関連施設の訪問を希望する日本人は3～5%であること，またサイパンで新婚日本人夫婦に戦跡を案内した現地のタクシー運転手が「戦争の暗い話を聞きに，こんなところに来たんじゃない」と言われたというエピソードも紹介されている。各地に残る戦争の傷跡を保存することは重要だが，それらをひとつの資料として捉えたとき，見る者の意識や立場によってその意義が変わってくる。

4. 戦争の歴史を問い質す感性と社会科教育

一昨年話題になった西牟田靖の『僕の見た「大日本帝国」』（情報センター出版局，2005年）の中で，西牟田はサハリンで「唐突」に出会った鳥居に衝撃を受けて「祖国，日本の過去」を意識することから，大日本帝国の足跡を海外にたどる旅を始めたと述べている。海外に残る戦争の痕跡，韓国や沖縄の慰霊碑が語る戦後へと続いている問題について見つめ，聴き取るリテラシーの育成は，戦争を知る世代が減少するなかで，社会科教育の喫緊の課題ではなかろうか。

戦争の記憶・記録が「ひと」から「もの」へ移り変わっているという認識のもと，国内外の「戦争遺跡」への注目が高まっている（十菱駿武・菊池実編『調べる戦争遺跡の事典』柏書房，2002年）。戦争を語るために，分野を超えた総合的な視野が求められてきているのである。

2005年度に高等学校の修学旅行先として最も人気のあった沖縄などでは，体験型の平和学習が盛んだ。もちろん戦跡や慰霊顕彰施設は海外や沖縄，広島，長崎に限定されるものではない。まずは自らの足元から，自分自身の問題として戦争の歴史を問い質すことが必要であろう。そこで養われた感性が，様々な資料から「歴史」を引き出してくる力となる。